

発達支援研究所ホームページ <https://smart-kids.co.jp/labo/>

## 題名「これが、わたしたち ～十人十色～」

### ♥作品解説♥

いろいろな見た目、性格、年齢。様々なひとと一緒に生活している。いろいろな命をカラフルな丸で表現しました。

(スマートキッズソリス両国)

## 関わり指針に沿った支援の実際 ～スマートキッズでの支援事例から～ 研究員 村上 浩将

前号の「きらっと」では、スマートキッズの「関わり指針」についてご紹介いたしました。「子どもの思いに沿った関わり」「子どもの力を信じる関わり」「子ども一人一人に合わせたオーダーメイドの関わり」——この3本の柱を元に子どもと関わり、支援をするのがスマートキッズの療育の基本です。今回はこの3つの指針を踏まえた、教室での実際の支援事例をご紹介します。

### ①子どもの思いに沿った関わり

自由時間の終わりを告げるタイマーが鳴り、多くの子が帰り支度を始める夕方の時間。しかし小学2年生のAさんだけ、自分で紙を切り貼りして作った「ロボット」を持ったまま、教室の隅に座り込んでいます。「帰りの会が始まるよ」「もうお家に帰る時間だよ」と指導員が伝えても、黙ったまま頑として動きません。こうした子どもは、「自分はまだ遊びたい、絶対に帰りたくないといったこだわりのような思いがあっても、気持ちを切り替えてスケジュールを守る」ことが課題となりますが、ただ指示を出すことだけが支援ではありません。

指導員はAさんに近づき、「ロボットでもっと遊びたいの？」と問いかけました。Aさんは無言でうなずきます。そこで指導員は「帰りの会」の絵カードを見せて、「遊びたいんだね、でも帰る時間になったね」と伝えました。Aさんはそれでも動きませんが、指導員は続けて手元の紙に書きながら話します。「明日、また来たら遊べるように、ロボットを取っておく？それとも、持って帰ってお家の人に見せる？」少し考えて、Aさんは「取っておいて」と答え、指導員にロボットを渡し、自分の荷物を取りに立ち上がりました。

このように、一方的に「帰りの準備をして」と伝えるのではなく、まずはAさんの「ロボットで遊びたい気持ち」に寄り添います。ただし、寄り添って終わりにはせず、次にどうしたいかを「提案」するのです。「次も遊ぶために取っておくのか、お家の人に見せたいのか」という2択を示すことで、Aさんの「ロボットで遊びたい」という思いに沿いながらも、次の行動への切り替えを促すことができたのです。

また、「ボールで遊びたい」という子どもの思いに沿ったスモールステップを組んで、一緒にさまざまな練習するといった支援も多くの教室で見られます。そのスモールステップには、ボールを投げる練習だけでなく、友達に「入れて」と伝える練習、間違っただけで「ごめんなさい」と謝る練習なども含まれます。そうした社会性を伸ばすための練習も、子ども自身の思いに沿って取り入れることで意欲的に取り組めるようになります。



### ②子どもの力を信じる関わり

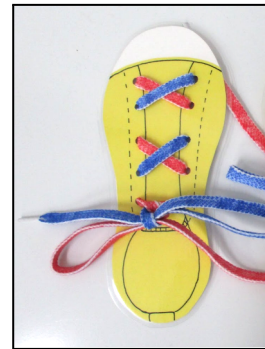
中学3年生のBさんは靴ひもを結ぶのが苦手です。スマートキッズでも個別課題の中で練習をするようになりました。様子を見てみると、「かがんだ姿勢で結ぶことが難しい」「靴ひもの両端の区別がつきづらい」といった原因が分かってきました。そこで指導員は、まず穴の開いたダンボールに、両端の色の異なるひもを通し、楽に座った姿勢でひも結びの練習ができる道具を準備しました。Bさんはその道具を使って懸命に取

り組み、1回で3分ほどかかりましたが、自力でひも結びをすることができました。指導員はその後も直接伝うことはせず、毎日この課題を繰り返し練習してもらいました。手

1ヶ月ほど経ったころ、同じひも結び練習の方法でBさんは、1回数十秒で結ぶことができるようになっていました。そこで指導員は、「Bさん、今日からはダンボールを床に置いて、かがんで結んでみよう」と声をかけます。すると、必要以上に苦しい姿勢で取り組んで苦戦していたため、正しいかがむ姿勢だけ、指導員からBさんに伝えました。また1回の時間はかかるようになりましたが、指導員は姿勢のことだけを声掛けし、この支援を続けました。

さらに1ヶ月後、いよいよBさんはかがんだ姿勢でひもを結ぶことができるようになっていました。靴ひもを自力で結ぶまで、あとほんの一步。そこからは、自分の靴で練習するようにしたようです。

この事例で指導員は、ひも結びの仕方をBさんの手を取って毎回一から教えることはしませんでした。なぜなら、時間はかかっても自力で結ぶことができているからです。支援者側が子どもの力を信じ、必要以上の手助けをしないことは、子どもが自分の力を信じるきっかけにもなります。しかし、そのためには子どもにあった環境設定が大切です。今回、Bさんにはじめから自分の靴で練習をさせていたら、なかなか上手いかないことで自信をなくしてしまっていたかもしれません。そうすると、ひも結び練習自体を「もうやらない」と拒み始めてしまう可能性があります。これを防ぐために、手で楽に練習できるダンボール穴から始めたのです。



また、大切なのは、子どもが成長したら課題のレベルも合わせて変えること。この事例では、途中から「かがんでひも結びをする」練習に切り替えました。簡単すぎることを続けていても、子どもは飽きてしまいますし、成長にもつながりません。自分では意識しづらい「姿勢」だけは声掛け支援をし、あとは子どもの力を信じて任せる。この関わりが、Bさんの成長につながったのです。

### ③子ども一人一人に合わせたオーダーメイドの関わり

小学4年生のCさんは、3年前にスマートキッズを利用開始した当初は笑顔で友達と遊んでいました。しかし最近、友達と関わるときにも笑顔が少なく、宿題への取り組みも嫌がり、何かあるとすぐに悪態をつくようになりました。言葉の使い方はその都度声をかけて指導しますが、なかなかイライラも収まらず、一緒に遊ぶ友達も減ってきました。指導員たちは、まずCさんの家庭の様子、それから学校の様子を保護者に確認することにしました。すると、家庭でも笑顔が減ってきたこと、宿題をやらないこと、そして学校では授業中の立ち歩きが増えて、テストの点数も下がっていることが分かりました。

指導員たちは、Cさんが学校の学習についていくのが苦しくなっていて、それが気持ちの余裕のなさにつながっているのではないかと見立てました。そこで、保護者と個別面談を通してじっくりと相談し、「スマートキッズでは無理に宿題を行わないようにすること」「保護者から学校に相談し、学習状況の確認や宿題の調整を依頼してみることを決めました。その後、Cさん自身は、スマートキッズが「無理に勉強をする場所ではなく、他者と楽しく関わる場所」になったことから、少し朗らかな表情を見せることが戻ってきました。

このように、子どもを取り巻く環境は決してスマートキッズだけではなく、家庭だけではなく、学校だけではありません。一人一人の特性に合わせることはもちろん、それぞれの異なる環境にも目を向け、保護者・学校・地域(相談支援専門員や他事業所等)と連携した支援を行うことが大切です。

またスマートキッズは、各教室同士や事務局との連携によって、一人一人の子どもを広い視野で支援しています。この事例のCさんも、スマートキッズの心理士チームで支援を検討し、教室に助言をしています。

ここまで、スマートキッズの「関わり指針」について、事例をもとにご紹介してきました。子どもの成長には我々の「関わり方」も影響します。上記の事例が、お子さまへの関わり方の参考になれば幸いです。

### 村上 浩将(むらかみ こうすけ) 臨床心理士、公認心理師、学校心理士

学校や児童発達支援、放課後等デイサービスにて、さまざまな個性がある子どもたちと直接かかわってきました。そして教育・心理の専門家として、一人ひとりの居場所をどのようにつくっていくのか、安心して成長できる場とはどんなものなのかを考え、実践してきました。これからも「スモールステップ」でお子さまのもつスキルを伸ばし、いずれはお子さま自身が自分で居場所をつくっていけるように、保護者の皆さまと力を合わせた支援を提供していければと思っております。よろしくお願いたします。